

第20回 市民参加懇談会コアメンバー会議

- 市民参加による政策検討会議 -

議事録

1. 日 時：平成17年2月23日（水）16：30～18：30
2. 場 所：虎の門三井ビル 原子力安全委員会第1、2会議室
3. 出席者：木元座長（原子力委員）、碧海委員、井上委員、岡本委員、小川委員、
小沢委員、蟹瀬委員、東嶋委員、中村委員、吉岡委員
（原子力委員会）近藤委員長、齋藤委員長代理、町委員、前田委員
（内閣府）戸谷参事官、後藤企画官、森本企画官、犬塚補佐
4. 議 題：1. 「第9回市民参加懇談会」の開催結果について
2. 次回の市民参加懇談会の開催について
3. いわゆる「サイレント・マジョリティ」をどう捉えたらよいかについて
4. その他
5. 配付資料
資料市懇第20-1号 「第9回市民参加懇談会」概要
「第9回市民参加懇談会」アンケート結果
「第9回市民参加懇談会」議事録
核燃料サイクル政策についての中間取りまとめ
（新計画策定会議（第13回）参考資料1）
安全の確保に関する中間取りまとめ
（新計画策定会議（第17回）参考資料1）
資料市懇第20-2号 次回市民参加懇談会の開催候補地について
資料市懇第20-3号 いわゆる「サイレント・マジョリティ」をどう捉えたらよいかについて
資料市懇第20-4号 原子力に関する国民世論の動向：とくにJCO事故後の世論
資料市懇第20-5号 第19回市民参加懇談会コアメンバー会議議事録

(1) 「第 9 回市民参加懇談会」の開催結果について

事務局から資料 20 - 1 号について説明した。

(木元座長) 今、説明があったが、市民参加懇談会、あるいは原子力委員会が開催しているご意見を聞く会とか、さまざまな会議の中で出たご意見は、政策策定のプロセスの中に、例えば、策定会議に、市民参加懇談会ではこういう意見が出たということ原子力委員会に必ずご報告している。それを記録して、策定会議の策定プロセスに反映させていこうという考えで、いろいろなご意見と一緒に報告している。

お手元にアンケートの結果や議事録があるが、その下に「核燃料サイクル政策について
の中間取りまとめ」と「安全の確保に関する中間取りまとめ」があると思う。これは、新
計画策定会議で取りまとめたもので、「核燃料サイクルについて
の中間取りまとめ」は、平成 16 年 11 月 12 日に、「安全の確保に関する中間取りまとめ」は、平成 17 年 1 月
13 日にそれぞれ発表した。これは決定ではないが、32 人の策定会議のメンバーが審議
を行って、方向性を示したということで、今ここにご紹介した大阪の市民懇でいただいた
ご意見も策定会議に報告した上で取りまとめられたという形になるので、後でぜひこれはご
らんいただきたいと思う。4 つのシナリオを示して核燃料サイクル政策について議論した
ことが書いてあるし、安全の確保に関することもここに列記してあるが、こういうような
ことを含めて論議した。その中にご意見を反映させたということになる。

この大阪の市民懇は、最初は核燃料サイクルについてだけやろうと思いましたが、た
またま美浜の事故と重なり、いろいろなご論議があった後で、開催するときには美浜の事
故も含んでご意見の募集をした。やはり美浜の事故については、かなり厳しいご意見が出
たということをご報告しておきたい。

全体としてはバランスよくご意見を聴けた。一応厳しいご意見は出たものの、ある程度
の方向性というものに関しては、策定会議でもご納得いただけたように、反対はするけれ
ども、概して、どうしてもだめだという強烈なアピールという形は出なかったように思う。
後でまたこの議事録などを読んでいただければ大変ありがたい。

この市民懇にご参加いただいた委員は、碧海委員、井上委員、小川委員、東嶋委員、中
村委員、吉岡委員。中村委員には司会、進行をやっていただいた。感想をいただければあ
りがたい。中村委員からお願いする。

(中村委員) 大分時間がたってしまったので、議事録を見て、ああそういえばそうだった
という感じだったが、改めて思い起こしてみると、いろいろな立場の方にご参加いただい

た。これはあらかじめ応募された発言者の方だけではなくて、後半、会場からも直接の挙手による意見を受け付けたが、いろいろなご意見の方がいらっしまった。反対の活動をしていらっしやる方もいらっしまったし、地元で、どちらかというところ推進、かなりもんじゅなんかについても理解をしていらっしやる方もいらっしやって、バラエティに富んでいたと思う。全体的な印象を一言で言うと、かなり成熟した討論会というか、懇談会になったなという印象。反対のご意見は反対のご意見であっても、理性的にお話をされる。それから人の発言を遮るような、妨害するような行為というのがほとんど見られなかったという意味で、同じ場を共有しているということをそれぞれの立場の方たちが理解をされて、話を聴こう、それから自分も意見を言おうという姿勢が非常に印象的だった。かなり場としては成熟したというか、理性的に時間と空間を共有できる懇談会になったと思う。もう半年ぐらい経つので、鮮明ではないが、何となくそういう印象は今も持っている。

（木元座長） 吉岡委員。

（吉岡委員） 私も記憶が薄れているが、いつも感じることだが、具体的にここで出た意見がどのように政策に反映されているのかがよくわからない、という批判があるのはもっともだ。それを私たちは検証していない。新計画策定会議の新計画はまだ出ていないわけだけれども、出すに当たって、これこれの意見がどのように反映されたかということは何か具体的に検証できればよい。今検証したら、ないという答えが出ると思うが、それなら意見をすくい上げるメカニズムを何かつくっていかないと、参加者は疲れる感じがする。しかし満足度が高いというのは、政策に反映されるというよりも、いろいろな意見を自由に言えてよかった、発散した、という、そういう場としては非常に高く評価されているためだろうと思うし、いいと思うのだけれども、政策に反映されているかどうかというのは、かなり疑わしい。

具体例を一つ挙げれば、脱原発シナリオも検討するんでしょねという質問に対して、当然そうだと思うと私は答えたけれども、どうもそうはならないらしい。まだ遅くはないと思うが。私たちコアメンバー自身も気に入った議論を政策に反映させようと努力はしているわけだが、どうもうまいきっかけが見つからないようだ。そこで、以前から言っているように、少人数でやったらどうか。私は、大学で先週金曜日に21世紀プログラムという学部横断プログラムの卒業研究発表会を朝から晩までやって、点数をつけたが、そんな形で政策研究を何人か選んで、1件につき30分ぐらい使って、徹底的にディスカッションをするとか、そういった別の形もあるのではないか。それは「ご意見を聴く会」をさら

に密度を濃くして、しかも一般市民にやらせるという、そういう形のイメージかもしれないが、そうした方式で試すのもやってみるに値すると思った。

(木元座長) 後でそのやり方についてはまたご提言いただければと思う。

今のお話に関連して、例えば脱原発でなく、脱核燃料サイクルについては、策定会議で核燃料サイクルの議論をするときに、策定のプロセスに反映させるということで、検討した4つのシナリオの中で出てきている。脱原子力については今後、原子力とエネルギーというテーマになったときに、その場でご意見があればもしかしたら論議されるかもしれない。そういう場合に、このプロセスにこういうご意見もあった、ということが論点の中に入ってくるだろうとしか今は言えないと思う。

(吉岡委員) 検証できる形で何か明確に、私たちはあなた方の意見を役立てましたというレポートができればいいなと思っている。

(木元座長) ありがとうございます。では、東嶋委員。

(東嶋委員) 内容に関してではないが、「核燃料サイクル政策に関してご意見を述べていただく場として」というテーマで大阪の市民懇は10月29日にあったが、その核燃料サイクル政策についての中間取りまとめが、早くも11月12日に出されている。それについては、私の周りの人たちでも、「この懇談会の意見が反映されるんですね」と言われていただけに、それからすぐにこの中間取りまとめが出たということが心配になる。今ちょっと読んだだけでは、どの部分に反映されたかわからないが、この期間的なことを見ても、何だか本当にこの市民参加懇談会が、単にみんなが意見を出し合ってよかったですねということで終わっているような印象を与えてしまっている。やはり理想的なことを言えば、1年か2年通して、この中間取りまとめに至るまで、2回、3回と同じようなことができたならよかったなと思っている。

(木元座長) ありがとうございます。おっしゃったことは、どなたもお感じになったかもしれない。確かに11月12日に出ているが、10月29日の金曜日に市民懇を開催し、その概要を11月1日の策定会議の資料にして報告し、11月2日の原子力委員会定例会議にも報告し、そしてそれぞれの会議におけるご意見を踏まえて策定会議の事務方が取りまとめの原稿を作成した。その作成には私たち策定委員も参加するが、ご意見はやはり反映されたんだと私は思いたい。どのご意見がどこに反映というのは言えないけれども、かなりのエネルギーを使って11月12日に出したので、ご懸念のことは頭に入れたい。ありがとうございます。

では、小川委員。

(小川委員) アンケートで「あまり満足しなかった」と回答された方のご意見の中に、「コアメンバーの人たちの意見がつまらな過ぎる」、「程度が低い」とか、不満の中に、「コアメンバーもあまり深く知識を持っていず、期待はずれ」とあるので、多分コアメンバーがすごい専門家だと期待されているのかなと思った。コアメンバーというのは必ずしも原子力の専門家ではないので、まだこのメンバーの立場というものが正しく理解されていないなと感じた。

ちょっと思い出して、あの日何が一番印象に残ったかという、第2部の方の会場同士での意見のやりとりで、個人攻撃があったのが私の心には深く、自分なりにつらい時間だったなというのがある。若い方が、特定の方を批判されていたが、2回ぐらいされていたので、個人攻撃はやめてほしいなという、それが一番記憶に残っていることです。

あとは、ご意見をおっしゃった方もいろいろな視点の意見でしたし、会場の方も活発に意見を言ってくださったということではよかったなと思っている。

(木元座長) 確かにそういうこともあった。ありがとうございました。

では、次に井上委員。

(井上委員) 会場に四国からたくさんお見えになっていらっしやった。それから中国地域の方もお見えになっていらっしやった。関西、大阪でしたから、交通がよくて来られたんだと思うが、ちょっと知っている方たち、グループで活動していらして、私たちともいろいろ交流する人たちがいい機会だからといって参加されておられたので、そういう意味では、会場は大阪だったけれども、広く関西一円、西日本のあたりにも広がって行って、興味を持って参加されたのはよかったのではないかと思う。

それから、美浜の事故からそんなに時間が経っていなかった。ちょうど10月ごろというのは、経産省とか、その他いろいろの絡みの中で、どういう経過をたどってどうするのかという、かなりホットな時期だったので、特に大阪、福井の方たちにとっては、熱のこもった参加なり、意見なりだったかなと思うし、大阪の都市の方達にしても、そういう意味では、あの事故をもってして身近な問題として原子力が近づいてきたというか、そこに幾多の誤解もあれば、思い違い、知識不足、いろいろあるが、そういうことを聞くことのできる都市だったのでいい機会だったと私は思った。

ただ、やはり核燃料サイクルから「もんじゅ」に至るまでのあまたの、たくさんの課題が一遍にあり過ぎて、これだけの分量のものをあの時間帯で全部議論し合うというのは難

しいから、できればこれは続けて、回を重ねたらいいかなと思った。

(木元座長) ありがとうございます。

では、碧海委員。

(碧海委員) 大体皆さんがおっしゃったことの中に、私個人の感じたことも含まれているので、あまり重ねて申し上げないが、先ほどのご意見にあった、会場でのちょっとマナーの悪い発言に対しては、司会の中村委員が注意された。ああいうことをきっちりやった方がいいなと私も思った。

中村委員は非常に成熟してきたとおっしゃったが、実は私自身は、この大阪の市民参加懇談会は、後であまり満足感がなくて、それがなぜなんだろうと自分で考えたが、議論がまとまらなかったのかなという気もしないでもない。

例えば、東嶋委員が言われたことに関連するが、ある方がひどくこだわって意見を言っていた。あの意見というのは、どういう意味であれだけ期日を何遍も何遍も確認されて、「中間取りまとめとは違って、最終的な決定は次の年の11月なんですね」ということをあれだけ確認されたのが、ほかの人に通じたのか。その部分は結構長くしゃべられた割には、ほかの人がぴんとこなかったのではないかという気もした。私自身もいまだによくわからない部分があって、もちろんパブリックコメントをもっと経なきゃいけないということと言いたかったのだらうと思うが、期日に非常にこだわられたので、私にはそのところはよくわからなかった。そういう意味で、私があまり満足感がなかったのは何故だろうと、いまだにちょっと考えている。

(木元座長) ありがとうございます。

(中村委員) あの方の場合は、一つのセオリーがあって、検証するというのがあの方の立場というか、あの方が考えている独自の運動方法なので、それで言質をとったり、文章になったものが何を反映しているのかというのを確認したいというのが基本的な考え方だらうと思う。委員長に一言言わせたいというあたりが、ちょっと露骨だったんで、ほかの方には、あの方のねらいというのはよく理解されなかったと私も思う。

それと、東嶋委員のご意見と、碧海委員のご意見を聞いて思い出したが、確かにこの市民参加懇談会から中間取りまとめまでの時間のことというのは、疑問視される声というのは私にも聞こえてきたが、ただ、市民参加懇談会としては、長計についてのご意見を聴く会というのは、口幅ったい言い方をすると、原子力委員会から依頼されたテーマなのだと思う。つまり、碧海委員の不満足感のわかる部分は、私たちが議論してテーマを決めて開

催場所を決めて、こういうアプローチでやりましょうと、明言して開催したケースではないので、そこはやはりニュアンスが違っていると思う。

それから、フォーカスが十分されていないという部分も、やはり非常にテーマが広い長計に対してのご意見ということで、どうしても広がってしまう。そこが、私自身の進行もそうかもしれないが、発言者の方たちも上手にフォーカスできないで、いろいろなことがやはり出てきてしまった。それが反省点というか、大阪開催での一つの特徴だったと思う。我々としても満足度が得られるのは何かと考えると、最終的には、このコアメンバーで考えたテーマで、考えた方法でやる市民参加懇談会というのが、本当に満足度がどうかと評価するときの基準なのだと思う。今回の長計についてというテーマは、言い方はよくないかもしれないが、「頼まれ仕事」という要素がどうしてもあったと感じている。

(木元座長) おっしゃることはよくわかる。ただ、原子力委員会が持っている一つの機能として、それを十分に生かしたいという部分があったと思う。原子力委員から、ご感想なり何なり、いただければと思う。近藤委員長。

(近藤原子力委員長) 何よりお忙しい中、ややショートノーツで、この会を開くことをお願いしたにもかかわらず、大阪までコアメンバーの方にお越しいただいて、時間を使っていたということについて、当日、お礼を申し上げたつもりでありますけれども、重ねてここで再びお礼を申し上げたいというのが最初の気持ちである。

2つ目は、もちろん今まさしく話題になったような経緯もあって、あるいは心ならずもご出席いただいたというコアメンバーの方もいらっしゃるのかなと思いつつ、そういうテーマになってお願いしたということについても、木元委員がおっしゃられたような意味で、私どもとしてはお願いをしたわけだが、碧海委員や東嶋委員がおっしゃったような感想になっているということについても、私自身もそういう問題意識を持って、ある意味ではまことに申しわけないという気持ちを持ちながらお話を伺っていた。しかしそれはそれとして、私どもとしては、その成果を新計画策定会議に十分お伝えして、審議に生かしていただいたと思っている。

吉岡委員が提起された反映という言葉、これは大変難しい言葉であり、そもそもただか100人の方にお集まりいただいて、傍聴者も含めて100人の方にお集まりいただいて、3時間の会合で何かの意見交換をするということが一体どんな意味があるのか、しかもそこで出た意見を反映するということがどういう意味があるのか考えなくてはならないと思う。「反映」という言葉の意味を厳密に定義する事は横へ置いておいて、反映すると

してもよく考えてみれば、100人というのは、1億人の100万分の1であり、100万分の1のサンプルのご意見を聞いて反映するの、しないのと言っていることが、国民の意見を反映すべしという大命題の中で、どういう意味を持つのかなということ、これも毎日悩んでいるところである。

もちろんこの会合のみならず、さまざまなお手紙、ご意見を原子力委員会のホームページ等でいただいて、国会からはさまざまな機会に原子力委員会はよく国民の意見を聞いて、それを反映せよと言われていているところ、それをどういうふうに解釈するかということは常に悩み、策定会議の場でもそういうご質問、ご意見をいただいている。これに関して私の解釈というか、私が皆様に申し上げているのは、右を向けと言われてたり、左を向けと言われたことを反映すると、これは首が一つしかないわけですから、反映のしようがなく、真っ直ぐ前を向くしかないわけだが、私どもは、なぜ右を向けと言うか、なぜ左を向けと言うか、そのなぜの部分をよく伺って、それがあつた種の疑問なり思想なり、それに基づくところを十分に審議の場で共有して、それを、いわば会議体として策定委員の皆さんが、国民にそういう哲学なりをお持ちの方がいらっしゃるということ踏まえつつ施策を選択するということなのだろうと、ある意味では割り切らせていただいている。大変たくさんの方、例えば、「ストップ・ザ・もんじゅ」というグループからは100万人近いご署名をいただいているが、その際にもそのようなことを申し上げて、なぜそうなのかをよく伺って、それにもかかわらず、それに反することをしなければならぬとすれば、それについて十分説明の入つたアウトプットを出していくというのが我々の責任、そういう意味で反映させていただきますということをお願いしている。それ以外になかなか反映という言葉の具体的アクションというのは、私も思いつかず、ぜひこれについても皆様の方からご教示いただけることがありましたらお願いしたいというふうに思っている。

(木元座長) ありがとうございます。後でまた皆様にご討議いただく。

(吉岡委員) 基本的に同感で、結論を反映させる必要は全然なくて、私がねらっているのは、方法論や視点でおもしろいのがあれば、委員がそれを生かすべく努力をするべきだ。だから委員の責任だというふうに思う。

(木元座長) ありがとうございます。大変うれしいお言葉であると思う。

齋藤委員長代理。

(齋藤原子力委員長代理) 相当時間がたつており、皆様方から今もお話があつたので、重ねてということになるが、先程いただいたご意見にいつも思い悩んでいる。反映という

言葉があったが、おっしゃったことがこの中間取りまとめなり何なりにそのまま書いていないと反映していないと言われると、非常に困る。私もあの場で、その前に青森でやったときに反映すると言ったじゃないかと相当責められたが、私は、「策定会議に報告をします。それをどう咀嚼（そしゃく）して、どういうふうにしていくかというのは、策定会議委員の方々のご意見のもとになるものである」というご説明をした。その辺のところは共通認識を持っていただかないといけないのではないかなと思う。

それから、核燃料サイクルについてのご意見を伺う会ということで、今回は急遽という感じもしたが、討論に入る前に「今審議はここまで、こういうふうに進んでいます」というご説明を申し上げてから、議論を深めるとか、そういうやり方もあったのではないかなと思う。市民参加懇談会をより密度の濃いものにしようとする、これから一つの課題について議論するならば、そういう絞り方もあろうという感想を持っている。

（木元座長） ありがとうございます。大阪でも簡単にはご説明申し上げたが、足りない部分もあったかもしれない。町委員。

（町原子力委員） 二、三、感想がある。一つは、まさに近藤委員長が言われたように、いろいろな疑問が提出されているわけだから、答え方を工夫する必要があると思う。市民参加懇談会では、我々原子力委員は聞き役ということなので、若干物足りなさが残るという感じがする。例えば、日本が核燃料サイクルをやると核武装につながるのではないかなという意見もあったが、その場でどなたかリアクションするというような工夫も必要ではないかなと思う。

それからもう一つは、かなりはっきりと意見の違う人もおり、「もんじゅ」は反対とか原子力そのものに反対という人と、エネルギーのセキュリティ上、日本には原子力が要りますよとはっきり言っている人がいる。お互いに非難しあうということではなく、同じ日本人として、日本の将来を一緒に考えていくような意見の交換がなされることが可能なのか、それとももう平行線だから、そういうことをやってもあまり意味がないのか、欧米ではディベートという形でよくやられているので、将来的にまだ工夫はできるかなと思う。ただ、市民参加懇談会をやっていくことは、非常に大事なことで、根気よくやっていくことが必要と考えている。

（木元座長） ありがとうございます。ディベートの件だが、最初から申し上げているのは、委員がまず聴くことであるが、パネリストや会場の方同士でディベートすることは大いに歓迎だと思う。

(中村委員) ディベートはいいが、やはり町委員が言われたようなその先の議論を彼らにさせるとするのは、現実には無理であり、時間の無駄である。バイオマスが原子力に代わると信じている方もいるわけだから、それはもう議論にならない。

(町原子力委員) あきらめてしまうのが、本当にいいのか。

(木元座長) いや、事実だけきちんと言えば良いのではないかと思う。

(町原子力委員) バイオマスというのは、実際どの程度利用可能なのかななどを正しく伝えることも必要である。

(木元座長) では、お待たせしました。前田委員。

(前田原子力委員) 大体、皆さんがおっしゃったことでもう尽きていると思うが、記憶に残っている印象を1つ申し上げると、パネラー7名の方に発言いただいたが、あの方々の発言というのは、正直申し上げてやや定型的で、突っ込みの足りないご意見が多かったような気がする。フロアの方の発言は、随分不規則発言もあったが、むしろ生き生きとしたご意見があったと記憶として残っている。

それから、先ほど小川委員がおっしゃったが、アンケートの中でコアメンバーに対する意見が出ていたが、やはりコアメンバーの役割とか、そういうことを事前にきちんと説明して、理解しておいていただいた方がいいかなという気はする。

(木元座長) 説明は申し上げているんだけど、なかなか理解していただけない部分があったかもしれない。

(2) 次回の市民参加懇談会の開催について

事務局から資料20-2号について説明した。

(木元座長) いつごろというのもあるが、まず地点で、どこでやったらいいのか。テーマを先にした方がいいのかもしれないが、そのあたり、蟹瀬委員、何かご意見あるか。

(蟹瀬委員) なかなか参加できなくて大変申しわけなく思っている。先程の話にちょっと戻って申しわけないが、やはりアンケートの結果で、割とベーシックな知識の部分というのも求められているような気もする。だから僕は個人的な立場でいえば、発電所のある立地の場所でやるというのも非常に意味があると思うが、消費地の方にもう少し力点を置いてもいいのかなと思う。

(木元座長) 例えばどこというのはあるか。

(蟹瀬委員) それは、皆さんとお話ししながらということにしたいと思う。

(木元座長) 東京、大阪、名古屋は策定会議の方でご意見を聴く会というのをやった。やっていないのは福岡や北海道がある。福岡は候補に入れてもいいのかなと思う。なぜかという、福岡は九州電力のエリアだが、九州電力はプルサーマルをやるということで、かなり活発にプロモートしている。したがって、市民の意見を聴こうという意欲があって、市民参加懇談会をどうしてやらないのかという声が、たまたま私が日曜日に佐賀県、玄海に行ったときにもあった。

(中村委員) 玄海はどうかと思う。はっきり言って、少し数多くやり過ぎである。九州電力もエネ庁もお互いにやっている。3カ月に5回も6回も行っているとも聞いており、ちょっとやり過ぎかなという気持ちはある。

(木元座長) あちらからのお声があるということだけご報告させていただいて、小沢委員、何か候補はあるか。

(小沢委員) わからない。

(木元座長) 例えば、消費地と立地地域と比べたら、どうだろうか。次にやるとすれば、今、大阪が最後だから、今度は消費地じゃなくて立地地域の方がいいのか、どうだろう。

(小沢委員) あまり行っていないところは、どこか。

(木元座長) 佐賀県玄海町が出ているが、それはちょっとやり過ぎになる。

(中村委員) やり過ぎである。それならば、プルサーマルだったら、伊方を先にやった方がいい。今、市民参加懇談会がもし福岡、佐賀でということになると、何かいかにもという感じになる。

(木元座長) 四国も同じである。ある意味では玄海より先にプロモートしている。

(中村委員) 立地でいうと、僕自身が興味を持っているのは、松江が町村合併で県庁所在地が立地になったこと。これは、やはり今までと違う。ここも、実はいろいろ講演会などをやられているようだが、ちょっと今までの立地と違うのではないか。

(蟹瀬委員) 頂いた資料では、立地と消費に静岡が両方入っている。これは、意味合い的にはどういうことか。

(木元座長) 厳密に言うと、御前崎となると発電所があり、静岡市になると大消費地になるという意味合いである。では、テーマの方を先にいったらいいのか、開催時期をいつにするかということになるが、例えば、今の中村委員が具体的におっしゃった島根県だとすると、テーマは何か。

(吉岡委員) これは原子力委員会のテーマではない気もするが、地震問題がとても話題

になっていて、この前、2月20日の日曜日に木元座長と私も参加して九州電力のプルサーマル公開討論会を玄海でやったときにも、大津波が来ればどうなるのかとか、そういう議論があった。東海地方の場合には地震で大丈夫かという議論がある。松江は島根原発と13キロしか離れていなくて、あそこの活断層が長いか短いかと話題になっており、関心と呼んでいるテーマだ。しかし、私たちが対応できるかどうかは、相当に無理じゃないかという気はする。

(木元座長) そうすると、もしそういう場合は安全性の問題として取り上げて、その中の1つに地震が出てくる可能性もあるというとならえ方になるか。

(中村委員) しかし、基本的な我々の姿勢は広聴である。だから、例えば島根県なら島根県松江市の人たちに、地震や津波についてどう思いますかと我々が聞く意味は、ほとんどない。

(近藤原子力委員長) 吉岡委員のご心配は、そこでやるとすれば、多くの人の関心がそこにあるということについて我々がどうするんだということかと思う。核燃料サイクルをテーマにしたとしても、地震のテーマが意見として出てくるに違いないというシチュエーションだということをおっしゃったと思う。したがって、松江でやると決めて議論せず、いろいろな意味で話題があまりないなら、消費地という意味で宮城県仙台市あたりはどうかかと思ったりする。仙台で何かこういうことをやったことがあるかどうか分からないが、経験的に私の記憶にはあまりない。

(中村委員) エネルギー関係のシンポジウムというのは、実は東北6県の中で青森県を除くと仙台が圧倒的に多い。だめとは言わないが、青森県の立地という条件を除くと、東北の中ではとにかくすべてのことが仙台に集まっていることは確かである。非常に開催機会は多いので、消費地の代表としてお話を聞くというのも悪くはないが、先程、蟹瀬委員が言われたことと関係するが、消費地で我々が懇談会をやるときの難しいところは、消費地の方はほとんど勉強していないので、我々がご意見を伺いたいという姿勢が理解できていない。それよりも、レクチャーされることの方を期待している。ですから、先ほどのコアメンバーの知識云々という話があったが、地方の中核都市の大消費地でやると、東京から我々が来たということは、やはり新しい知識とか疑問点を解明してくれるのではないかという期待がある。この市民参加懇談会をやって、我々が何かを逆にそこから吸収するのは非常に難しい。

(木元座長) 市民参加懇談会をそもそも立ち上げたときは、何か原子力にかかわるイシ

ューを持っているところ、例えば一番先にやったのは刈羽でやった。それは、プルサーマルを導入するかしないかで住民投票をやった。そういうところを選んでいった。それから、例えば東電の不祥事があった。そこで埼玉でやったとか、ダイレクトにテーマが存在していた。だんだん違う方向にも広げてきているので難しいが、何かそういう課題を抱えているところを探すという手がある。

(中村委員) やはり、テーマが先か。何を我々が聞こうとしているかということが先かなと思う。

(木元座長) 先かもしれない。それで場所が決まる。今、そうなると、課題を抱えているところというのと、六ヶ所がまずある。市民懇としては六ヶ所ではやっていない。ただ、そういう意味では、六ヶ所はいろいろな会が催されているということはある。あとは、プルサーマルか。

(齋藤原子力委員長代理) 青森でご意見を聴く会的时候は、六ヶ所から賛成の人も反対の人も結構来ていた。だから、青森のときに六ヶ所の方は相当言いたいことをもう言っているのではないかなという感じもする。事実、青森県庁の人から六ヶ所村の人が公開の場でこれだけ発言したのは初めてだと聞いた。

(近藤原子力委員長) テーマということで、極端な意見だが、例えば原子力発電ではなくて放射線利用とか、そういうテーマというのもあるようにも思う。意見が出てくるかどうか全然わからないが、ほとんどなかったりするかもしれないが、切り口としてはそういうのもあるのではないか。

(木元座長) これは碧海委員らが、やっていらっしゃるので、ちょっとご意見を伺いたい。

(碧海委員) 放射線でも、やれると思うが、私はCO₂と原子力というテーマではやれないかと思っている。というのは、私が気になっているのは、例えば経団連の自主行動計画にしても何にしても、見ているとやはり原子力とCO₂の排出量のことはあまり大きな声で言われていない。私は、大きな声で言ってもいいのではないかと思うが、それがあまり言われない。例えば先ほどのバイオマスとか、そのほかのいろいろなエネルギー源があるが、そういうものとの比較は、専門家の方にはわかり切っていることだろうけれども、一般のレベルでいった場合には、よくわからないのではないかと思う。これだけ京都議定書がニュースになっている時代に、一体みんなどう考えているのだろうかというのが興味ある。

(木元座長) 1つは、環境省の見解が大分前に出て、今回、少し原子力を言っているが、何かそういう遠慮っぽいところがあったりする。原子力の悪いところである。井上委員。

(井上委員) 今おっしゃった意見で思いついたのだが、新聞記事に書いておられたガイア理論のCO₂と原子力のラブロック博士の話。そのことを、温暖化とかCO₂とか原子力ということに絡めるとするのは、タイムリーかなというような気がする。

(木元座長) いいかもしれない。ちょっと大上段に振りかぶるということでもないが、割合、本音で言えることかもしれない。

(小川委員) CO₂と具体化されると、深くなり過ぎてしまうと思うので、「環境と原子力」としてはどうかと思う。

(碧海委員) 地球温暖化でもいい。

(岡本委員) 「京都議定書と原子力」というのも、ストレートでいいかもしれない。

(木元座長) そうすると、今出たのは、CO₂と原子力ではなくて、温暖化が出たし、地球環境が出たし、京都議定書。今いろいろご意見が出たCO₂と原子力の絡みでやるというのはいかがですか。蟹瀬委員。

(蟹瀬委員) それは非常にテーマとしてはおもしろいと思うが、それはすごく啓蒙的な意味合いを含むことになる。そういうことを主眼に置いて、啓蒙活動だとしてやるのなら意味はあるような気がするが、では、そのことに関して皆さんどうお考えですかと聞いても、正直言って、あまり期待はできないかなと思う。だから、先ほど中村委員がおっしゃったように、我々の方から情報提供する、そういう位置づけでやるのなら意味はあるだろうが、オリジナルなもともとのこの会の考え方でやるのだったら、かなり難しいかもしれないと正直思う。それは、もちろん2つくっつけてやっていいわけで、A or Bという話ではないと思いますが。

(碧海委員) そういう意味では、放射線も全く同じだと思う。非常に啓蒙的な意味合いを持っていて、一般の人たちはほとんど知らないということだと思う。ただ、テーマとしては、放射線も十分おもしろいなと思っている。

(中村委員) もし従来のスタイルとコンセプトにこだわらないのなら、そのどちらのテーマもいけると思う。ただし、やはりスタイルは相当変えなければならない。例えばある種啓蒙的なシンポジウムと、それについての疑問やご意見を伺うという2部構成にして、前半については原子力と地球環境、CO₂排出でもいいし、放射線の日常的な利用でもいいけれども、やはり情報提供を正しくして、それについてご意見を伺う、あるいはご質問

を何うという形以外は、成立しないと思う。

(吉岡委員) 先程、セキュリティの問題が出たと思う。つまり、核を打ち込まれそうになったらどうするかであるとか、あるいは今度の原子炉規制法の改正案で、取り締まりをもっとずっと厳しくするべきかどうかとかそういうものだ。いわゆる安定供給を意味するエネルギー・セキュリティではなくて、核による攻撃や破壊とそのリスクの問題というのは、これは原子力委員会のテーマである。

(木元座長) テロと原子力。

(吉岡委員) みんなテロと分類してしまうのは、それは極論なので、原子力と保安というような形のほうがよい。なぜ見学しにくくなったんだとか、そういう問題もある。

(中村委員) 保安とか危機管理とか、そういうテーマですね。

(木元座長) 危機管理。北朝鮮の問題も出てきているから、関心はあるかもしれない。

今の私の判断では、きょうはまとまらない。したがって、申しわけないが、今出たテーマを少し整理させていただいて、こちらでリストアップする。それで、皆様方に、またファクスでも何でも、メールでも送らせていただく。その上で、また新しいのを書いていただいてもいいし、丸をしてくださってもいいし、お送りください。そして、それによって場所を決めるという次のステップに入る。日時は大体いつごろがいいかだけ。

(中村委員) なるべく早くできれば。というのは、開催が結構、間があいている。

(木元座長) 長期計画などもあるから。事務局としては、何月ごろになるか。

(犬塚補佐) 今2月の中旬ですから、1カ月募集を考えると、物理的に早くとも4月以降ではないかと考えられる。

(木元座長) そうすると、4月から5月の連休明けぐらいの間。5月中旬まで辺りか。

(中村委員) 逆に、一応できるだけ早くということであれば、やはり4月下旬、連休前にというのをターゲットにして作業を進めて、それは相手もあることだから、物理的にもう1カ月待とうとかということはあってもいいと思う。

(木元座長) はい。では、そこまでちょっと目途をつけさせていただいて、あとはまたメールかファクスでご相談させていただくということにしたい。

(3) いわゆる「サイレント・マジョリティ」をどう捉えたらよいかについて

事務局から資料20 - 3号について説明した。

(木元座長) さらにヒントというか、何か1つの方向性を示していただきたいと思って

いたところ、たまたま岡本委員が本をお書きになって、その中でいろいろなサイレント・マジョリティにかかわることを採り上げていらっしゃる。お手元の資料にあるけれども、1つの世論調査だが、「原子力に関する国民世論の動向：とくにJCO事故後の世論」ということで、この中で1つ見えるものがあるのではないかと資料をそろえていただいたので、レクチャーしていただければありがたいと思う。

(岡本委員) まず、資料の2ページ目をごらんいただきたい。

これは、総理府の世論調査をずっと系年的に見て、そこからパーセンテージを年度順に並べたものである。それに対して、いろいろなイベントを入れている。上の黒い数字が「原子力発電所を増設する」に賛成の意見、下の点々が「原子力発電所を廃止する」に賛成の意見である。

ここからわかることは、1つは、チェルノブイリはあまり大きな影響が日本の世論にはなかったということ。それから、このデータではJCOの事故がある程度ネガティブな影響があったかのようにうかがわれる。

もう1点、別の資料が3ページ目にある。これは、朝日新聞の定期国民意識調査から同様の作業をしたもの。上の方、丸になっているのが原発推進賛成という意見、三角になっているのが原発推進反対という意見である。年度によって、若干、言葉の細かな違いなどはあったけれども、それはこういう目的上、査証してパーセンテージをお出ししている。1996年までであり、JCO以前でとまっておりますけれども、これを見ると、チェルノブイリはある程度ネガティブな意見、影響があったかもしれないと考えられる。

4ページ目をごらんいただきたい。私どもは、JCO事故の直後に調査をした。そこからきょうの議論に合うデータを少しピックアップしてご案内申し上げたい。実施時期は、1999年11月の第1週から2000年1月10日までの時期である。これは、事故が起こったのが99年の9月末であり、あまり世論が調査期間中に大きな変動がないように考慮した。データを全部見て、特異なデータがないのを確認し、全体を1つのくくりにして分析した。サンプリングは、若干特殊なサンプリングをしている。1) 事故当該地を独立したサンプルの対象にし、2) 全国の原発の立地地点を全部サンプリングし、3) 政令指定都市を全部サンプリングした。人口に対する抽出比率はこの1)、2)、3)によって異なってくるわけだが、それを統計計算するとき調整する手法があるので、そのような扱いをした。

5ページをごらんいただきたいのだが、実はここで用いた世論調査は、全く同じものを、

等価性のある翻訳によって、アメリカとフランスで行っており、ともにナショナルベースのランダム・デジット・サンプリングという電話番号からランダムにサンプルする手法で行い、アメリカ、フランスと比較できるような形にしてある。アメリカは、もともと原子力に対する世論が最も冷えているところで、フランスはご承知のように、原子力に対しておおむね受容的という世論が形成されていると思われるが、そこと比較できるようにしている。

例えば、5ページをごらんいただくと、原子力があなたやご家族の健康にリスクはあると思うか、それから国民全体の健康にリスクがあると思うか、こういうものを比較すると、このようになる。

ここでa bとかaとかがついているのは、これは同じ添え字のもの同士には、統計的に平均値の有意差がない、そういう計算の結果を示している。ですから、例えばグレーの方を見ると、立地地点と都市部、いわゆる消費地の間には有意差がある。しかしながら、そのほかの間では有意差がないということである。同じように、ごらんいただくことができる。

次をごらん頂きたい。6ページだが、これは電力不足の可能性に直面したら、電力供給のために新しい原子力発電所を建設することに対して、どのような意見を持っているか。これをごらんいただくと、これは事故の直後であるにもかかわらず、事故当該地域の世論はそれほど反対ではないということがごらんいただける。ですから、事故の直後であっても、実は都市部が一番原子力に対して批判的だという従来型の構造が変わっていないということである。当時、何かこういう事故が起こってしまうと、もう世論が冷えてしまっただけでも原発を受け入れないだろうというような報道をマスコミが随分行ったが、私どもの意見では、それは事実認識には基づいていない。実際には、立地地点それから事故当該地域、両方とも世論の構造というものは割合安定していて、それはまた別の多次元の尺度で見ることができるのだが、非常に安定した構造を持っていて、それほど揺れていない。

それから次に、7ページをごらんいただきたいのだが、8ページ以降、1つのキー概念として用いている原子力支持的態度因子という一種の態度のテストがある。その項目が、そこに挙げたものである。これは、そこに因子負荷量があるけれども、主成分分析をして、この組み合わせで足していくと、比較的いろいろな誤差を吸収してよい値が得られるということがここでわかっている。

8ページをごらんいただきたい。今ごらんいただいたものの合計数値の地域別の比較だが、ごらんいただけるように、事故直後の11月であるにもかかわらず、原子力支持的態

度は事故当該地域で最も高い。その次に高いのが原発立地地域で、一番低いのが都市部、いわゆる消費地であるということがごらんいただけるかと思う。

次の9ページをごらんいただくと、今度はまた全国ベースで見ているが、年齢による差がある。それで、大体30代、40代の人が最も不支持的であり、支持をあまりしないという傾向があって、それから若い方は若干支持的で、また、老齢になるにつれて若干支持的である。これは、1つ別の要因があり、原子力もそうだが、いろいろなリスクに対する心理的な鋭敏さというのは、自分の子どもの下の子の年齢の影響を受けるということがわかっている。そのことをごらんいただくと、結局、自分の子どもの下の子の年齢が10代の前半であるときに最も鋭敏になるということがあるので、こういう傾向を示しているという部分もあるが、それ以外にも要因がある。

それから10ページは、原子力支持的態度の男女比較である。ほかのリスクも大体そうだが、一般的に女性の方がリスクに対して敏感である。原子力についても同様の傾向を見てとることができる。

ついでに申しあげると、その10ページのところだが、性差がどのようなことから生じているかについては、その心理的な性度のテストがある。男性的な性格であるか女性的な性格であるか、それもここに含めている。ほかのリスクでもそうだが、原子力についても心理的な制度の影響が大体半分ぐらいだが、それを除去しても生物的な性別の影響を有意に受けるということも、リスクの世界では安定しているという1つの認識である。

次に、11ページをごらんいただきたいのだが、原子力に対する支持的態度というものは、政治的な立場の影響を受けるということが安定してわかっている。右へ行くほど保守的なこれは政治的な立場をスコアにする仕組みがあるわけだが、最も保守的な人が支持的である、最も革新的なことが非支持的であるということは、これもどこの国へ行っても安定して出てくる要因である。ですから、原子力に対する態度というものは、それに対する不安であるとか、そういうものももちろん反映するが、同時に政治的な立場の影響も色濃く受けるということがわかりいただけると思う。

これをもう少し露骨にしたものが、12ページである。これは、単刀直入に支持政党を尋ねている。ごらんいただくとこのように、当時はまだ自由党があったわけですが、支持政党が保守的な政党であるほど原子力に対して支持的であって、リベラルな政治的な立場の人ほど支持的でないという結果が安定して出ている。

それから次に、今度はやはり態度ステートメントですが、政府や産業界は、科学技術の

リスクに対応するための適切な決定をしていると信頼して良い、これはいろいろな政治心理学の方で、社会的トラスト、信頼感というものの扱いの研究分野があるわけで、そこで安定して用いられるスケールだけれども、これをごらんいただいても、事故直後であるにもかかわらず、事故当該地域で政府に対するトラストが高い。有意に低いのは消費地であったということがわかっている。

ですから、14ページをごらんいただきまして、重要な結論をまずまとめますが、まずJCO事故によって、世論が従来型に比べて大きく硬化したという事実は恐らくないものと考えている。直後であるにもかかわらず、先ほどごらんいただいたように、割合 私 は練れたという表現をしておりますけれども、練れた世論の構造というものを示している。それから、原子力に対する態度には、もちろん原子力に個別の不安であるとか知識の多寡とか、そういうことの影響もあるが、人格特性的な要素や社会価値観的な要素というものが反映している。その反映している程度はかなり大きいというようにご認識いただければよろしいかと思う。

したがって、原子力に対する態度が、原子力に対する情報だけに依存して形成されるわけではなく、原子力についての広報をすることももちろん大切だが、それ以外のことも大切ではないかというように考えている。

最後に若干申し上げたいことは、やはり今回こういう研究をしてみたわけだが、実際には新聞の世論調査にしても総理府の世論調査にしても、少し言葉が変わったりしていて、なかなか測定項目が安定していない。それで、なかなか安心して使用できる、経年的に見ることのできるデータが少ないということが1つある。ですから私は、やはり中・長期的には原子力世論を定期的にチェックするというのをシステムにすることがよいのではないかと考えている。

それからもう一つは、私は立地地点などでの政策策定も、住民投票などよりも世論調査の方がよろしいのではないかと幾つかの理由で考えている。理由も幾つかあるが、最も大事な理由は、レファレンダム（住民投票）の場合、そのレファレンダムのステートメントの書き方、あるいは原子力発電所を導入することのメリットをどのような表現でどこまで書くかということによって、かなり票が動く可能性がある。そうした場合に原子力は、例えば実際には三法交付金をどういうふうに処遇するかとか、いろいろほかのイシューと関係して大体採択されるという構造を持っているので、言ってみるとそのイシューが、一次元のイシューではなくて多次元のイシューであるということになる。そのとき

に、レファレンダムの場合には、イシューを一次元に無理やり表現して、なおかつ、イエス・ノーしか聞けないという問題がある。それからもう一つは、公職選挙法が適用されないために、実際に地元に行って調べると、職場や組合やいろいろな形での圧力のかかっていることがある程度あって、なかなかサンプルを安心して解釈することができにくい場合も実際には多い。それよりは、例えばそれぞれの地域の利害関係というものをきちんと整理した質問肢調査というものをすると、質問肢調査は上手にプロがつくったものだと、大体150項目ぐらいまでは回収率に影響せずに含めることができるので、かなり多くのものを調べることができる。

そうすると、反対のお気持ちを持っている方は、例えば居住地区がどこかに集中しているとかある職域に集中しているとか、そういうふうなことがわかってくるので、その土地の原子力周辺の心理的な利害関係というものがどのようになっているかということが多次元に描くことができる。そうすると、そのデータを解釈することによって、どういう政策と一緒に導入することによって、それぞれの土地にメリットの大きな導入の仕方をするることができるのかという探索的なデータ使用をする可能性が広く開けてくる。そういう関係を、レファレンダムをする時点で見落としている危険というものを考えたときには、私はレファレンダムをするよりも、むしろきちんとサンプリング計画を行った上でのサンプル調査をするということの方が、政策立案過程としてもよるしいのではないかというように従来から申しあげている。

(木元座長) ありがとうございます。

ご体験、あるいはお仕事の中からご報告いただいた。きょう大きく掲げたのがサイレント・マジョリティということだったんですが、この先生のご調査の中では、サイレント・マジョリティというのはどのような動きをし、どのような反応をするものなのか。

(岡本委員) サイレント・マジョリティというのは、原子力というのは非常に大きなイシューであるのだが、例えば原発を導入することによってどういうプラスがあるのかということがきちんと自分にとってわかりにくいために、態度を保留している、あるいは態度の表明を保留しているような人々が相当程度含まれるのではないかと考えている。

そういう人たちは、どうしてもある時点で態度を表明しなくてはいけなくなった場合には、原子力に対する態度によって表明するのではなくて、ここに出ているように年齢であるとか、自分の子どもの年齢であるとか、あるいは自分の政治的な立場の好みであるとか、そのようなものに基づいて、原子力そのものに対する態度というよりは、そういうものを

私どもはソーシャル・リフレクションと言っているが、いわばほかの価値観やほかの特性から反射的にできてくる価値表明としての賛成ないし反対を行うポテンシャルを持っている。そういうものをサイレント・マジョリティと考えることがよろしいかと考えている。

(木元座長) そうすると、そういうグループというのは、いわゆるソーシャル・リフレクションとおっしゃったけれども、リフレクトするものが、何かの因子が入ってきたときにぱっと変わり得るといふ可能性があるわけですね。

(岡本委員) そうです、はい。

(木元座長) そこを押さえていけば、例えば原子力なら原子力を正確に理解して下さるといふ方向にシフトする、意思表示ができる。

(岡本委員) はい。単純にいくかどうかわかりませんが、例えば交付金が出てきたときに、それを老後の施設に使うのではなくて、図書館をつくりましょうといふふうになったときに急に態度が変わるとか、そういう可能性がある。

実際に、レファレンダムが行われるときには、こういうところの次元、ディメンジョン間の動きというものを分からない状態にしてレファレンダムをとっていることが多いので、それは社会科学的には正確な態度表明とはみなしにくいと考えている。

(木元座長) そうすると、サイレント・マジョリティをどういうふうに扱うのか、あるいはどういうふうに取り込んでいくのか、そういうことについて、きょうは1つのヒントを与えていただいたと思うが、碧海委員、まずいかがか。サイレント・マジョリティが気になると、前からおっしゃっていた。吉岡委員がおっしゃっていたのかな。

(碧海委員) 今のお話を、大変有意義に拝聴した。私たちも、やっている活動の中では調査が好きで、すぐに調査をしたがる場所があるが、今のお話の中で非常に気になったといふか、なるほどと思ったのは、私がつき合っている人たちの大部分は、やはり原子力はとにかく反対という人が非常に多い。激しい反対派ではないのだが、とにかく原子力というのは嫌だ、反対という人が、私の友人にしても職場の仲間にしても多い。積極的に原子力に理解を持っているとか推進の活動をしているとかといふ人は、ここにいらっしゃるような方たちは別として、私の周辺には、実は非常に少ない。

私自身も、では原子力推進、賛成、この10%のうちかといえ、絶対そうじゃない。私も、ある選択としては原子力をとるけれども、では推進派かと言われたら、絶対違うなと思ふし、一般的な価値観に関して言うならば、むしろ自分のことを革新派だと思っている。ですから、普通の人が見ると、何であなかが原子力に賛成なのといふふうに見る方が

多いのではないかと思う。

私は、調査とかサイレント・マジョリティということに非常に関心があるのは、人間というのは本来複雑なものである、そんなに一面的に推進だ、反対だなどと言うわけがない。まずそういう複雑な1人1人というものをいかに理解するかとかとらえるかということをやると以外にはないのではないかと思っている。調査というのも、そういう複雑な人間をとらえるのに1つの効果があるのではないかと。ですから、岡本委員がおっしゃった大きなくりとは違った意味で興味がある。

(木元座長) 今たまたま「調査」という言葉が使われたが、そうすると例えばこの市民参加懇談会でサイレント・マジョリティの方々の意見を聞いて、なるべく原子力を正確に理解していただきたいと思ったときに、どういう手法があるか。

(碧海委員) 私は、今までにも何遍かきつと申し上げていると思うが、私自身が25年ぐらいエネルギーとつき合ってきて、電力会社の仕事もしてきて、それで今の私があるわけで、相当な情報も得て、説明も聞き見学もし、いろいろなことがあって今の私があるということだ。一般のそれこそサイレント・マジョリティの大部分は、そういう経験もほとんどないと思う。それは、すごく手間のかかることだし時間もかかることだけれども、今の私というのは、そういう情報を得られたこととか、体験ができたこととか、こういう委員会に参加しているいろいろな議論に参加できたこととか、その点で非常に恵まれていると思っているので、やはりほかの人たちだってそういうことを経験すれば、変わる人はたくさんいると思う。だからといって、別に魂を売るわけじゃない、自分の人生哲学のコアの部分を売り渡すわけではない。

(木元座長) このメンバー会議でも、何が何でも原子力しかないという人はいないだろうと思う。東嶋委員、どうか。

(東嶋委員) どちらでもなくて、とにかく1人でもたくさんの方がもっと知ってもらいたいという気持ちですが、今のサイレント・マジョリティのことにに関してですが、ちょっと先生にお伺いしたいのは、こういうアンケートを、1つは定期的にチェックする必要があるというのは、確かに私も賛成である。ほかに最近出されている幾つかのアンケートを見ると、この80%に当たる人たちに、例えば原子力とかエネルギー問題に対して少し勉強してもらおうとか、あるいは啓蒙活動をして、理解が深まったとしても、別に賛成の人が増えるわけではないというようなアンケート結果が出ている。とすると、このサイレント・マジョリティの方たちに対しては、幾ら啓蒙活動をして賛成になってくれるわけで

はないので、この方々に対して私たちができることというのは、反対になるかもしれないけれども、純粋に何か理解活動を着実にやっていくしかないというふうに私はそういうアンケートを見てとらえている。そのあたりは、先生はどのように考えているのか。

(岡本委員) ちょっとはしょった申し上げ方をするので、幾らか乱暴な議論になるが、もともとイシューがそういうふうに難しくなることが多いので、代表民主制度というものがある。ですから、結局、次元間の関係が輻輳しているものについては、手続的にはオープンな手続、聞く姿勢というものを維持しながら、やはり最後は行政の責任で決めていかなければならないという決心をする時期が来るのだ、それが行政だというような割り切り方をすることは避けられないと思う。

(木元座長) それでいいのか。

(近藤原子力委員長) 岡本委員の話は、結論を急ぎすぎているのがちょっと気になる。きょうプレゼンテーションをお願いした趣旨は、何も世論の取り扱いの話ではないと思う。原子力はよくないというふうに確信しておられる方と原子力はいいと確信しておられる方がいて、その間に、いいときはいいし悪いときは悪いと、そういう割と日本人の国民意識調査をずっとやってこられた、岡本委員がよくご存じの最近亡くなられた林先生の本に書いてあるように、日本人というのは割とほんわかというか、極端にならない人が多いという、そういう意味の人をサイレント・マジョリティと言うのかどうかよくわからないが、大事なことは、恐らくここでの議論のエッセンスは、7ページの負荷因子だと思う。これは後追いというか、あわせて相関をとってみると、こういうことに対する意思表示との合計をすると、総論としての支持的態度がメジャーになりますよという、そういう意味の因数分解をしているので、それがこの負荷量というものが、いわゆるサイレント・マジョリティとそうでない人で違うのか変わらないのかということだろう。

(岡本委員) 違わない。

(近藤原子力委員長) そうすると、あとはこの項目に対して、いわゆる原子力を支持する方は、まさにこういう設問に対して負荷量の高いところにイエスを置く。それから反対的態度をとる方は、逆にこういうものに対してノーと答えると。

(岡本委員) 同じ負荷量の高いところにノーと答える。

(近藤原子力委員長) そういう構造になっているわけですね。だから、日本のエネルギー輸入を避けるためには原子力をふやした方がいいと考えるか考えないかが、原子力を支持する、しないを分けていると。あるいは、発電所を建設する専門家、技術者は信頼でき

るといふことに丸をつける人は、総論としての原子力も支持します。それから、原子力は不道徳だといふことに丸をつける人は、結果として反対の人になる、こういう構造になっていますといふことがこれからわかる。これが、いわば心の鏡といふか、分析結果の1つの構造といふこと。

(岡本委員) 重要度が、大体このケースに比例すると考えていただいてよい。

(木元座長) 碧海委員もサイレント・マジョリティをとてにも気にしていらして、それから齋藤委員長代理も委員会でサイレント・マジョリティとおっしゃいました。そして、やはりこれをターゲットにして、もし市民懇をやったとしたら、どういうことができるだろうかといふことを探りたかったといふことである。

(前田原子力委員) 去年、ご意見を聴く会をたくさんやった中で、コンセンサス会議の話がよかった。あれは、南山大学の小林先生。あのときに私は、サイレント・マジョリティは一体どうやったらわかるんでしょうか、コンセンサス会議ではわかりませんねといふことを質問したが、先生は、サイレント・マジョリティは、要するに自分の意見を持っているか持っていないか、持っていても言わない、そういう人たちは、極端に言うならば考慮に入れる必要はないといふような意味のことを言われた。

私は、それはちょっと違うのではないかといふ感じがしたけれども、ただ、自分自身に照らして考えてみて、サイレント・マジョリティといふのは意見を持っていない人なのか、持っているけれども発言しない人なのか、どちらなのかと疑問を抱いた。

私は、例えば裁判員制度は賛成か反対かとか、遺伝子操作は賛成か反対かとかと置きかえると、自分からはもうそんなことは外で絶対意見を言わないと思う。聞かれれば、何か言うと思うけれども。そういうものについて、私はサイレント・マジョリティの1人だと思う。では、そういうサイレント・マジョリティに対して、我々は原子力を理解してもらうためにはどういふアプローチをしたらいいのか。何も意見を持っておられない方だったら、それこそ広報、啓蒙活動をすれば、少しく答え、態度が変わってくるのかもわからないけれども、聞かれるまでは言わないよといふことは、レファレンダムでもしない限り答えが出てこないのかなといふ気がしている。その辺、岡本委員はどうお考えか。

(岡本委員) サイレント・マジョリティといふ言葉は、社会心理学ではない。社会心理学では、意見については受容域と拒否域と非関与域といふものを設定する。この場合、非関与域が、おっしゃっているサイレント・マジョリティに当たる。

ただ、今おっしゃっているのは、要するに80%ぐらいの人の意見がないように見える

ということですが、それは恐らく、その80%ぐらいの人たちは意見がないのではなくて、知識がない場合もあるが、あとは次元間に利害関係上コンフリクトがあるので、自分の意見を十分定められない人になる。

ところが、難しいのは、専門用語でフォールス・コンセンサス・エフェクトという効果があって、それは例えば両方に意見がイエスとノーの極端に分かれているときに、黙って何も言わない人は、イエスの人から見ると、自分の陣営に見える。ノーの人から見ても、自分の陣営に見える。ここで何か例えばイエス・ノーに極端に分かれることを言って、2人ずつが何か意見を言う。ほか人たちは意見を保留していると、両方とも過半数は自分の側にいるというふうにする。これは、実験的にも非常に追試率の高い現象なので、にせの同意効果とか見せかけ上の同意効果というんですが、原子力の世論の構造というのは、強く主張している人から見た構造と、それから態度表明を保留している人から見た状態は、全く違う地図となる。強い立場をとっている人は、サイレント・マジョリティの人たちは本当は自分と同じ意見なんだけれども、何かの事情があって意見を表明しないだけであるというふうに見える。ですから、仮に10%・10%で真ん中に80%あると、両方とも90%は賛成だ、90%は反対だというふうに思っている。そのために、両方が非常に険しい議論をするというようことになりがちとなる。ですから、それが社会心理学的に解釈した場合の今の世論の鳥瞰図ですね。

(蟹瀬委員) サイレント・マジョリティというと、僕は学生のころに習ったデビット・リースマンを当然思い出すわけで、それからもう一つは、僕らジャーナリズムの世界では大変な巨匠であるウォルター・リップマンという人が「Public Opinion」という名著を残されているけれども、サイレント・マジョリティの人たちがいかにメディアの影響を受けやすいかということが、この2つの本では共通していることだと思う。

ですから、もしプロニュークリアー(原子力賛成)にそちらを引っ張っていきたいというのであれば、メディアをどういうふうに扱っていくのか、あるいはメディアに対してどう働きかけていくのか、そういうこと抜きでは恐らくできないのだろうと思う。こういう、言ってみればミニ集会的なことをやっていることの影響力の少なさ、それと比べて、例えばインターネットという新しいメディアでの広がりを持っている影響力の大きさ。こういうものを比較して、ではどちらをどういうふうを選択していくのかとか、もし目的がそういうことであればそういう選択が必要なので、サイレント・マジョリティと直接どうやって意見、オピニオンをつくっていくのかという議論をする中に、メディアというものの存

在を無視しては議論できないだろうと思うのだが。

(木元座長) ありがとうございます。私も、同意見である。吉岡委員。

(吉岡委員) 先ほど、南山大学の小林傳司氏の話が出たけれども、私の大学院の2年後輩で親しくしているのだが、私も、気分としては彼と同じで、言わぬやつの気持ちは聞く必要ないという、もともとそういう感覚の持ち主である。大学では、とにかくコミュニケーションできる人を育てようということで、頑張ってきた。サイレント・マジョリティを消滅させるための撲滅運動をかなりやってきた者としては、すくい上げる必要はないんじゃないかと思う。このアンケート結果を見ると、何かあまりクリアな結果が出ていないなと思う。

ただ、6ページ目を見ると、この質問はないでしょうというふうに思う。つまり、1999年の段階というのは、95年くらいのときに日本の電力消費は横ばい近くなったんだけど、その後も計画に従って電力会社はぼんぼんつくっていたわけだ。99年というのは発電所が一番余っている時期で、2000年くらいからはさすがに、電力会社は当面建設凍結とかと言い出す。一番余っている時代に電力不足の可能性というのは、何かとても変だなと思う。こういう問いに答える人たちは、果たして本気になれるだろうか。

(木元座長) おっしゃっていることの意味はよくわかるが、その辺が難しいんだろうと思う。現実には、自分が足をつけている世界を中心に考えてやると、今のようなおっしゃい方になるだろうと思うし、そうじゃなく広く考えて、こういう状況にあなたが置かれた場合はどうだろうか、ある種の仮説みたいなことであれば成立する。将来を展望する意味でも。

(中村委員) 根本的なことだが、サイレント・マジョリティの定義はどうでもいいし、どうとらえたらよいかというのは、岡本委員の今のプレゼンテーションというのは1つのとらえ方を示されたわけで、それで終わりなのではないか。どうとらえたらよいかという1つの方法論を今伺って、なるほどと納得するところもあったし、負荷量のファクターもなるほど、因数分解というのもおもしろいなということで、一応これは、基本的にテーマは終わりだと思う。つまり、市民参加懇談会でどうとらえたらよいかということが今ここに出てくるということは、勉強会だったら今の岡本委員のレクチャーでおしまい。そうではなくて、はっきり態度を表明しない人に態度を表明させるために何をしたらいいかということを知ろうとしているのなら、それは今、市民参加懇談会コアメンバーがやる内容なのかどうか、そこが私には理解ができない。ましてや、どこかで市民参加懇談会をやると

きに、このテーマをどう生かすかなどと言われても、まさに「物を言わない人」だから。

(木元座長) あり得ないということ。

(中村委員) この言わない人たちが、どう振れるかというのは、ファクターはいろいろありますよと今のレクチャーでよくわかって、実感としても非常によくわかる。

(木元座長) 今日のサイレント・マジョリティがなぜここに入ってきたかということ、過去に原子力委員会でもサイレント・マジョリティをどう把握して、もしアプローチできるのならどうしたらよいかということが論議されたし、この市民参加懇談会の中でご意見が出てきた。そういうグループを対象、ターゲットにしなくていいのかということが多分あったんだと思う。中村委員がいろいろまとめてくださったけれども、とりあえずサイレント・マジョリティという言葉が出てきて、そしていろいろな調査もあったりして、それを一応押さえておきましょうと。その上で市民参加懇談会はどういう行動をとるか。その方たちに対してではなくて、サイレント・マジョリティを意識する場合でも、レクチャーをいただいた中で自分たちが判断していけるんだらうと思う。そのための糧になることだったのではないかという気がする。

(近藤原子力委員長) 今日、せっかくこういうデータを出していただいたので、なるべくこれを有効に使って、議論を発散させないという意味で、僕は7ページにまだこだわっているのだが、サイレント・マジョリティをとにかく強く支持しないし強く反対しない人と、例えばそう定義させていただくと、この因子負荷量にかかわる態度表明が、「とても強くそう思う」、「どっちでもいい」あるいは「強く反対だ」と、それぞれの負荷量について、イエス・ノーじゃなくて、そういうある程度スケールのついた聞き方をしているわけですね。ですから、その場合にサイレント・マジョリティというのは、このマイナスの要因とプラスの要因に両方とも強くイエスで「とてもそう思う」ということでキャンセルアウトして、ゼロになっているという人がいると。それから、これについて「まあそうかな」と非常に弱く、しかし両方、プラスにもマイナスにもイエスと言っている人がいると。そうすると、この後者の方は不勉強というか、あまり関心がないのかなと。それから、両方強く言っているのは、ある程度そういう何らかの学習とか体験とかによって、そういう因子について確信を持っていると。しかし、それはキャンセルアウトしているから、たまたま態度としてはニュートラルに近い態度になっている。そういう2つの極端に整理したときに、私は勝手に、そういうややニュートラルな態度を示す人が、結果としてそうなる人はそういう範囲の中にいる人というふうに整理すると、いわゆるその真ん中辺にいる

人というのは、どのカテゴリーに入るのか。

(岡本委員) それは、両方いるということ。

(近藤原子力委員長) 両方いるということですか。

(岡本委員) その葛藤関係を理解しないで答えている人も随分いるわけです。

(近藤原子力委員長) いるし、葛藤しながら、しかし中間的な答えをしている人もいる、両方いると。それは、割合はどのぐらいですか。

(岡本委員) それは、どちらも本当に普通の分布と同じところにいます。

(近藤原子力委員長) これが世論というか、態度表明の日本人の姿ということなんですね。

(岡本委員) はい。ですから、例えば京都議定書は賛成だけれども、原子力は絶対反対とかと言う人も、平気でたくさんいるわけである。

それから、さっきのことでちょっと申し上げると、例えば市民懇談会に生かすか生かさないかという問題ですけれども、それは結局、サイレント・マジョリティというのは総論としては出てこないんだけど、各論になったときには態度が出てくる可能性のある人でもあるわけですから、それは例えば、おたくの町に交付金で短大ができるとしたらとか、職業訓練所ができるとしたら賛成ですかとか、物すごく具体的なポリティカルなディメンジョンが入ったときには、サイレント・マジョリティの人でも、そのイシューについては意見が出てくるポテンシャルがあるわけです。

ただ、今までずっと拝見していると、そういう踏み込み方をこちらが多分幾らか避けているから、そうするとサイレント・マジョリティを表へ出してくることはなかなか難しくなってくる。何度も言うように、ディメンジョンの組み合わせでサイレント・マジョリティになっている人もいるので、そのローカルなディメンジョンが入るとか、そういうことがあるとサイレントでなくなってくる可能性がある。

(木元座長) 直結して市民参加懇談会に結びつけないで、一般論として考えてみた方が、この場合、取り上げなくても良いのではないかなというような思いがしているけれども、小沢委員、聞いていらして、何かご意見は。

(小沢委員) 要するにサイレント・マジョリティとかなんとかと一般論を言ってもしょうがない。一応何となくだけれども反対している人と、非常に静かに、実は推進なんだけれどもあまり言わないようにしながら、アンケートに「おもしろかった」と答える人とかというのでずっと来ているわけだけれども、何かあったときに聞いてみると、例えば住民

投票などをやると、反対じゃないですか。例えば、原発をつくりますと言うと反対。巻町がそうだったように。

だけれども、とりあえずこの市民懇談会で説得したい対象として想定している人たちがいるのだと思う。今の場の雰囲気と言うと。だけれども、説得の範囲内にいない。だけれども、その人たちはサイレント・マジョリティかということ、事原子力に関しては決してそうじゃない。出てこないけれども、嫌だと言うことはもう大体わかっている。

だから、さっきからの議論は、ちょっと違うと思う。サイレント・マジョリティではないわけですよ、原子力に関して言えば。そういうものがあつた例はない。ただ、姿をあらわして参加してこないというだけで、サイレントではない。新たに原子力関連施設をつくらうという、例えば廃棄物の問題とか、オーケーもなかなか出そうもないという、具体的な問題になったときにあらわれる勢力を、何となくサイレント・マジョリティと考えているみたいだけれども、それはしつこいようだけれどもサイレント・マジョリティではない。

(木元座長) だから、それをサイレント・マジョリティでくくっていいのかなのかということがあつた。違うだろうと思うけれども。

(小沢委員) 違いますよ。原子力に関しては、サイレント・マジョリティはいませんよ。

(碧海委員) 私、サイレント・マジョリティという言葉を使いましたか。多分、サイレント・マジョリティという言葉は使わないと思う。強く推進する人と、強く反対する人との間にいる人たちということは言っている。それはつまり、いつも私の目標でもあるから、放射線の調査にしたら何にしたってそうである。そういう人たちは意見がないなんて、とんでもない。それは生きているのだから、ありとあらゆることに対して意見を持っている人はいっぱいいる。だからお願いだが、このテーマは結構この委員会の中でも議論してもいいテーマだと私は思っているけれども、あまりサイレント・マジョリティというような言葉でくくらないでほしいなと思う。

(齋藤原子力委員長代理) 要するに、サイレント・マジョリティという用語がいいか悪いか、あまり議論してもしょうがなく、先ほど岡本委員がおっしゃったように、例えばの話で右側に10%いて、左側に10%いて、その真ん中の80%の人、そういう人をどう表現するかというだけの話だろうと思う。

それで、要するにこの市民懇で何回か私も同席させていただいて、そこにいらっしゃる方というのは、100人から150人ぐらいですね。せっかくあれだけやったことが、も

っと広がっているいろいろな人に聞いてもらえないか。もっと幅広く聞いてもらえる、それは蟹瀬委員がおっしゃったようにテレビでやればいいけれども、原子力委員会がテレビを借り切るわけにもいかないし、インターネットで同時に中継を流すといったようなことで、いわゆる80%の人がどういうふうに思うかというような、もっとそういう理解を深めてもらうことがあっていいのではないか。あるいは、ここでやるのが適切か、あるいは広聴というよりも広報という意味合いで、そういう人に向かってやるということも必要かもしれないというようなところに、1つ問題点があるのではないかなと感じている。

それから、大阪で、「初めはよくわからなかったけれども、最後になって、原子力って本当に役に立っているんだと知った。それで、立地地域の人たちも相当苦労されているということがわかった。私も何かできることをやらなければいけない。私のできることを教えてください。」とおっしゃった方がいらっしゃった。私は、非常に印象的に覚えていますが、そういう人、理解していただける人もいるということが、1つは大事じゃないかなというふうに考えている。

(木元座長) ありがとうございます。

齋藤委員のおっしゃったことは理解しましたがけれども、市民参加懇談会はもう4年近くなりますが、そもそも立ち上げたときは、広報は考えていなくて、まず「広聴」でした。

ですから、確かに刈羽に行ったときも、初めてきょうプルサーマルの意味がわかって、これから知りたいというのを最後に女性の方がおっしゃってくださって、それで碧海委員、井上委員たちが、その後で今度フォローとして、レクチャーに行っているという経緯がある。ですから、市民参加懇談会では、それを目的としてやることはないとは私は考えているのだけれども、これから方向転換することが皆さんのご意見であればそうなると思う。では、今日は何かいろいろあったが、事務局。

(犬塚補佐) そもそも、今回ご議論いただいた背景として事務局の方で考えたのは、市民参加懇談会というのは、市民との相互理解のための方策としてどのようなものがあるだろうかということを検討していただく場でもあるので、先ほどの齋藤委員長代理のようなお話もあり、どうやって幅広い方々からご意見をいただいたり、そういう窓として意見を伺うような場として、より進展した形で活動ができないかということの1つの視点になるかなと思い、テーマをご提案させていただいたところである。

そういう意味では、1つのテーマとして市民参加懇談会で取り上げていただくテーマというよりは、市民参加懇談会を開催するに当たっての手法として、何かその際の参考にな

るものはないだろうかとか、相互理解のための頭の整理として、どのような整理をしたらいいのだろうかということでご議論いただいたものである。

一方、市民参加懇談会を開催するに当たっての手法として、来年度の4月から行われる予算の中で、テレビ会議で2つの会場を中継してやるようなもの、もしくはインターネットを介して複数の方々にごらんいただけるようにするということをイメージして予算要求もしている。ただ、以前、中村委員がおっしゃられたように、インターネット中継する場合のデメリットもあるので、市民参加懇談会の活動の中で、そういう手法もとれるオプションがあるということも頭の片隅に置いていただければと思う。

(小沢委員) コアメンバー会議の手法ということか。

(木元座長) いえ。

(小沢委員) 懇談会か。

(木元座長) そうである。

(中村委員) テレビ会議方式は、おもしろいかも知れない。

(木元座長) ということで、本日は市民参加懇談会をどういうふうに展開していくかという基本的なことを話させていただいたと私なりに解釈している。

それで、現実の問題、4月以降のことについて、先ほどご提案がいろいろありましたので、それはまとめさせていただく。先ほども申し上げたが、何らかの通信手段でお送りするので、またお時間をいただくが、お答えいただければと思うので、よろしく願いしたい。ありがとうございました。